

# UIFA JAPON NEWSLETTER



No. 91 May 25, 2012

## ■主な内容

震災1年で見えてきたもの—UIFAの一年間の活動とその方向性について  
特集:

岩泉・小本のいま・・・春遠からじ  
「どこでもカフェ」の活動を振り返って  
連続研修会「復興計画とは何か」報告  
People First! 人々が培ってきた文化社会に根差した復興を  
連載:被災地通信(3) —一年目の被災地を巡り—

横浜でパイオニア展開される!

第55回海外交流会「持続可能な社会におけるデザイナーの役割」報告  
ボランティア活動とASWA組



小本駅前広場で慰霊の灯に点火 (写真: 岩井)

## 「震災1年で見えてきたもの—UIFAの一年間の活動とその方向性について」 After one year from the Tohoku Earthquake: UIFA's projects and their future directions

黒石いずみ  
KUROISHI Izumi

3月11日に東北各地で開催された大震災慰霊祭は、一年が過ぎてもなお人々の心に刻まれた痛みが深い事、そして被災地の現状が復興に遠く、地域ごとに復興事業の進度に大きな差が生じている事を私たちに知らしめました。本号では、被災地でUIFAが行ってきたこれまでの活動を振り返り、今後への展望を考えたいと思います。

会員個人やUIFAの活動は、瓦礫掃除から文化財保護、地盤診断、布団や物資の寄付、イベント開催など、広域に及び多様なものでした。大会では、松川会長によってそれらの活動が総括され、専門家としての活動よりは市民サイドが多いこと、そして行政による復興支援の専門家組織には女性の登用が少なく、今後はUIFAの専門的関与が必要であることが指摘されました。おそらくそれは行政の問題だけでなく、建築家や都市計画家、研究者としての女性の活動やUIFAの組織としての

姿勢、更に、そもそも専門家は震災復興においてどう行政や社会と関わることができるのか、市民サイドの活動は現在の社会にどう意味を持ちうるのかという事が、改めて問われている状況だといえましょう。

学生とのボランティア活動では、被災の状況を主体的に経験し、人々と交流して他者の痛みを感じる力や、自分の役割を実感するよう促す事ができました。会員の皆さんによる被災した方々の生活改善や心のケアに関する活動には、生活や地域環境を専門的に扱う女性ならではの視点があったと思います。家庭人として多くの役割を果たしながら専門家として社会に貢献してきたからこそ、総合的な柔らかい視点です。現在、それが大きな行政レベルや専門家としての仕事に反映されないことの歯がゆさと問いはますます強くなっています。その問いに対して、本特集ではいくつかの真摯な意見が寄せられました。



気仙沼でお母さん達と学生との昼食会 (写真: 黒石)



平行配置の仮設住宅の路地 CAFE (南三陸町) (写真: 渡邊)



現代建築女子4年制卒業生の日 (作: 黒石)

## 第20回 UIFA JAPON 総会と記念講演会のお知らせ 20th UIFA JAPON General Meeting and Commemorative Lecture

日時: 2012年6月16日(土) 13:15 ~ 2012年度UIFA JAPON 定例総会  
14:30 ~ 記念講演会

場所: 財団法人経済調査会4階大会議室 (中央区銀座5-13-6 東銀座三井ビル 03-3542-3333)

講演: 伊東豊雄氏「これからの建築を考える」

岩泉・小本のいま……春遠からじ  
Current situation of Omoto in Iwaizumi: Spring has yet to come  
寺本嘶子 TERAMOTO Sekiko

表題は「だれでもフォトグラフィア」写真展のタイトルです。復興の春を待ち望んでいる小本地区の方が撮影した「いま」を展示しています。写真家(橋本照嵩氏)が出演フィルムの中から選び取った小本のいまの写真展です。写真展前日、会場の小本駅構内の連絡通路で UIFA と支所、三陸鉄道が協議、同時にレイアウト図を基に最終決定と準備です。1周年式典当日は、10名の老若男女(出展者)の手伝いを得て、賑やかに、一気に会場設営が完了しました。集落の連帯力！被災前、ここは豊かさを誇る漁港だったそうで、地域の活力がにじみでてくるようでした。

岩泉町は、会長の長い所縁があるところです。災害見守りチームが検討して支援先と決め、町と協議をもち、企画案の助成申請(日本財団、中央共同募金会等)を経て、この事業が採択され、今回の「写真展」になりました。

当初の計画では、被災した小学校の全校児童を対象にしていました。ですが、被災地では、通常カリキュラムの運営、学校生活もまだまだ困難な状況でしたので変更し、参加者を募ることになりました。1回目のフォトグラフィアは70歳代から8歳の21人で、結果、多世代の被災後の暮らしの「いま」を切り取ることに繋がりました。これは、先に開催した「どこでもカフェ」が、これまでの数々の UIFA 事業による「おもてなし」の活動同様、被災地の信頼をえる糸口になったためと思われる。

「やるなら早くやろう！」支所からも既に声が上がリ、今年度のフォトグラフィア事業は進行中です。被災者自らが写し取る「小本のいま」が蓄積される継続支援です。

そして、支援活動は、多くの会員の関与、カフェや写真展への参加や支援物資の提供などを通して広がっています。取り組みは、会長の陣頭指揮のもと、理事



多くの方々の関心を呼んだ写真展(写真：在塚)

やブレーンの支援をうけた ALL Uifa Japon の事業として助成事業への申請、企業等からの寄付等の取付け等と大きく展開しています。

「どこでもカフェ」の活動を振り返って  
Report from “Dokodemo Café(Café at everywhere)” projects  
稲垣弘子 INAGAKI Hiroko

「どこでもカフェ」は被災地の復興まちづくりの実現プロセスにおいて、仮設住宅住民と仮設外住民が様々な形で関わることによって、新しい街に親しみを持ち、より安全・安心な暮らしが出来るよう「まちづくりのソフト面の支援」を目的にしました。具体的には仮設住宅内外の様々な年代層の人々が集まり、相互の情報交換や意見交換を行い、場合によっては行政との意見交換もできる場を提供します。加えて、カフェという飲食を共に語らう場、衣類等の提供の場とすることで、ともすれば復興・まちづくりにありがちな意見の相違による軋轢を抑え、より良い関係とアイデアが出る場となることを目指しました。

第1回開催時は、カフェに来訪されるか心配もありましたが、お抹茶人気と、非日常的空間の設えの新鮮さも加わり約100名参加。お茶を飲みながらの語らいで話題も広がり、仮設住宅の住まい方や復興対策への議論もされるようになりました。

回を重ねる毎に、仮設住宅住民が準備や片付けに積極的に参加し、仮設外居住者も手伝いに来ました。仮設内外住民の協力体制も出来つつあります。3回目には要望のあった岩泉仮設でも開催。小本には岩手県建築士会の4名の方も参加するなど地元の支援の輪も広がりだしました。

今後も継続を望む声は強く、また他の地域からも開催を求める声が上がっています。今後は地元協力者と仮設内外の住民の協力で開催できるシステムを構築し、専門分野の経験を活かした支援に力を注げるよう考えて行きたいです。活動母体として12月に「おもてなしチーム」を立ち上げましたので、興味のある方は是非ご参加ください。



第3回「どこでもカフェ」子供たちもお手伝い(写真：平野正秀)

連続研修会 「復興計画とはなにか」  
Continuing Lectures on Recovery and Reconstruction

第9回 2012年2月25日(土)江田隆三氏(株式会社地域計画連合代表) : 「福島県新地町の場合」

福島県新地町の浸水区域は町の20%弱、福島第一原発から約50KM東にあり、低レベル放射性物質の除染計画が策定された。その復興再建イメージ案は太陽光発電、自然学習林などエコな視点で、住宅地も木造戸建て長寿命の住宅であり、美しい街並みを目指している。コミュニティの維持、被災者の高齢化を踏まえ、町の中心部のアクセスのよい場所で再建を図る点は評価できるが、配置計画には、新地町らしさをどう表現できるか、難しい課題があるのではないだろうか。

復興計画に地域の顔が見えないのは計画プロセスの問題だろ

災害復興見守りチーム参加報告  
UIFA Japon Disaster Support Team

うか。新地町の文化や歴史、コモンスペース、人と人のつながり、周辺の既存集落とのつながりなど、計画案に暮らしから考えるキーワードが欠けているように思えるのが心配である。

各被災地の定型的な高台移転案はともすれば風土を考えないものが多く、「ちょっと待って！」と声をあげたくなる。暮らしの原風景や、次世代への継承を、町全体の創再生といかに連続させるか、持続可能な暮らしのイメージやまちのかおりを考える事が必要であろう。阪神淡路のまちづくりの教訓は「急がば回れ」と、住民にとっての真の“復興”を目指す事であった。講師は“今、町に足りないものは土と人”という。今、私たちにできることは何か、再び考え時である。(渡邊喜代美)

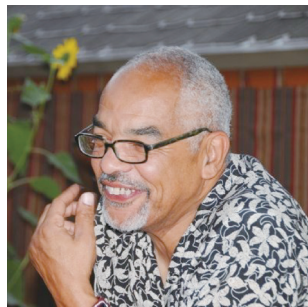
**People First!: 人々が培ってきた文化社会に根差した復興を  
People First!: Reconstruction from the disaster based on their  
socio-cultural foundation** 古村伸子 KOMURA Nobuko

専門家として復興に協力することは、市民サイドの活動とともに大きな意味を持っています。カトリーナ（ハリケーン2005年）後のニュー・オリンズの復興に力を注いでいるランドスケープ・デザイナーたちによる一つの活動を報告します。

カトリーナによって最も被害の大きかったニュー・オリンズでは「想定外の」洪水で堤防システムが崩壊し、家屋や車などが海岸近くから19kmも内陸に流されました。被害3日後に、コロラド大学デンバー校ランドスケープ・デザイン学科で話し合いがもたれ、5名以上の教員が復興協力プロジェクトに参加し2006年春学期以降いくつもの「ニュー・オリンズ・スタジオ」による協力プロジェクトがこの時スタートしました。そのリーダーがオースティン・アレンです。彼は2010年にはニュー・オリンズにあるルイジアナ州立大学（LSU）に移籍し同講座を継続しています。

「スタジオ」は計画・設計演習に似た6単位の講座ですが、修士課程では特に現実のコミュニティに貢献するプロジェクトが取り入れられるため奨学金を得る制度もあり、デンバーでは「ニュー・オリンズ・スタジオ」受講者を含め、建築・都市計画学部大学院生130名以上に2006年だけでも最大約2300ドルの奨学金が授与されました。このおかげで、デンバーの学生がニュー・オリンズでワークショップを開くことができました。

LSUでのアレンのこの講座の目標には「人々の社会文化の、織込まれたようなまちの襞（ひだ）について完璧なインタビューを行い、その結果を実際の街区のランドスケープと都市計画に活かす可能性と限界を明らかにする」とあります。これについてアレンは「住民中心に復興が行われるべきだ。People First! デンバーの仲間が、ニュー・オリンズで数千人のボランティアの参加で議論の場をつくった。これが、当局に復興を住民中心にと認めさせる方向に向けた。しかし今も一番の問題は、住民組織に力が無いことだ。」と語ってくれました。彼の笑顔が、電話の向こうに見えるようでした。



アレン氏、写真は本人のフェイスブックより

**連載：被災地通信（3）一年目の被災地を巡り  
Report from the Disaster: Visit to the damaged area  
after a year** 岩井 紘子 IWAI Hiroko

仙台での慰霊祭には出ずに、岩泉小本駅舎でのUIFA JAPON ‘だれでもフォトグラファー展’と、国際ゾンタクラブ（世界の女性の地位向上と、女性子供支援奉仕団体）による仮設住まい学童への学習の場である岩手県山田町ゾンタハウスを經由し、震災1年後の各地をめぐる。

小本駅では翌日から部分開通する三陸鉄道試験列車を見上げ、2時46分のサイレンを合図に霽雪混じりの寒い駅広場での献花拝礼。民家の明りが頼りの、何の目印もない夜更けの山田町ゾンタハウス探し。翌朝目にした瓦礫こそ取り除かれた死の街釜石市の商店街光景。TVに良く出てくるあの高台上り、津波風景を再現想定してみたが、どうしても実感は沸かなかった。津波被害痕跡そのままの鶴住居（うのずまい）そして大槌町。処狭しと建ち並ぶ役場、警察、消防等の密集仮設庁舎はとても仕事出来るような環境でない。まだまだ瓦礫が其処かしこの陸前高田市。壊滅状態の高田高校、警察署等いたる所に写真、お花が供えられていた。小学校校庭での慰霊祭用大仮設が解体作業中。イベント一つ出来ない街になっていたのだ。気仙沼市での復興仮設商店のあさひ鮎を食べるべく3時頃まで我慢していたのに、全て閉店中。マスコミ等で復興元気を伝え聞くが、のぼり旗や景気付け飾りが痛々しく、何となく寂しく、荒涼としている。これだけダメージ受けたのだ、早々立ち直れるものではない。

この1年、建築士会、ゾンタクラブ、全国法人会として様々な支援活動に参画しているが、私個人としては、千年に一度という災害、自分の目で確かめ、見て感じて知って欲しい、そんな想いで数々の被災地ツアーを引き受け、被災者との橋渡しをしている。来るべき日のため被災者は、日々の生活の糧になるものの援助品で暮らし、兎に角貯蓄しなければならない。永い永いご支援を皆さん待ってます。助けて上げて下さい。こんな1年目、被災地はまだです。



小本駅の三陸鉄道北リアス線開通直前の試験列車

**横浜でパイオニア展開かれる！**

**“FOR THE FUTURE: The Pioneering Women In Architecture” In YOKOHAMA**

吉田洋子

YOSHIDA Youko

パイオニア展は東京で3回開かれてきましたが、横浜でも是非開いて欲しいという思いからあざみ野にある男女共同参画センター横浜北に相談したところ、それが実現しました。

「未来へ～女性建築家のパイオニアたちの肖像展」と題した展示はミニギャラリーで開かれました。期日は2月7日（火）～3月4日（日）で実質26日間でした。来館者はその期間中、全体で、約350人でした。自由に使える交流ラウンジの中にミニギャラリーがありますのでたくさんの方に見ただけで本当によかったです。

神奈川方向の建築関係の方たちにPRをしました。また建築の専門家以外の方も熱心にご覧いただきました。女性の建築家のパイオニアの人たちがその時代に建築の仕事で働くということの大変さやエネルギーに思いをはせて下さったようです。



親子連れも多い横浜会場

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

URL: http://uifa-japon.com

発行 2012年5月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866  
URL :http://uifa-japon.com

### 第55回海外交流の会「持続可能な社会におけるデザイナーの役割」～再生可能なエネルギー基盤の経済に向けて～ 55<sup>th</sup> International Lecture "Role of designers in Sustainable Society" 三戸美代子 MITO Miyoko



講師の倉阪氏 (写真: 須永)

2011年最後の海外交流の会では、環境経済学者、環境政策学者として幅広く活躍中の倉阪 秀史先生(千葉大学大学院社会文化科学研究科 教授)に、今後の持続可能な社会の展望と、デザイナー(設計者)が果たすべき役割についてご提言いただいた。印象に残ったこととして下記を挙げる。

- 再生可能エネルギー技術は北歐諸国のマネでなく、地熱や小水力の活用をしてゆけばポテンシャルとしては足りている。蓄電池ではなく、化学的蓄熱技術を用いればエネルギーの保存、運搬は可能。
- 持続できる社会には、ストックのメンテナンスを行う経済(=モノを使い倒す仕組み)が要。特にエネルギーの自給自足ができる地域のストックに注目すべき。一方で上手な『まちたたみ』も今後の課題。
- 『サービサイズ』(製品を売るのではなく、サービスの対価を徴収するビジネスへの転換)が必須となり、廃棄までを考慮した生産者(設計者)の責任も増していくことになる。
- 日本の建築物のメンテナンス費用は世界的にかなり低い。メンテナンス責任を設計者(企画策定者)に求めて行くことが必要。

以上のように興味深い知見を多く得られたことは有意義であったが、これらはまだほんの入口を覗いただけとも言える。まずはデザイナーである前に一個人として、さらに長期的な視野で望ましい社会構造について学び、考えていかなければならないと痛感したことが、何よりの収穫であった。

#### ■ 役員会報告

第10回2月22日(2012年) だれでもフォトグラフィ写真展準備、第4回パイオニア展開催決定、NL90号発行、91号企画、海外交流の会開催、このゆびとまれ、次回海外交流の会企画、初釜開催、おもてなしチーム活動助成、2012年度総会日程、被災地支援活動義捐金についての報告・協議。

第11回3月23日(2012年) 総会、海外交流の会準備、だれでもフォトグラフィ写真展準備、パイオニア展開催、NL91号企画、総会資料案についての報告・協議。

第1回4月12日(2012年) どこでもカフェ開催、だれでもフォトグラフィ講演会開催、海外交流の会企画、NL91号進捗、ASWA組活動、パ

#### ■ ボランティア活動と ASWA 組

##### Volunteer Activity as ASWA Team

中野 晶子 NAKANO Akiko

「無償の奉仕」と「報酬のある仕事」。働き方の両極にありながら、その中間の営みを探ってきました。「働く」という言葉は、「はた」にいる人を「らく」にする」ということばから生まれたと言われます。「らく」は「楽しい」です。身近にいる人を「らく」にできなくても「楽しく」することなら、アートの力を借りればできそうです。

はじめはUIFA JAPONからの活動費で材料を購入、手弁当、交通費支給0、デザイン料皆無、打合せ会議費無し、実現するだけで「Lucky」から始まり、最近では交通費の一部補助や、相手学校に材料費の提供を実費でお願いすることも可能になりました。私たちのカンカンガクガクの打合せによって生まれるアイディアは、**値段を付けられない価値**そのものと自負して、毎回新しい挑戦をします。

私たちはこの活動から、完成時の感動と喜びを報酬として受けます。なぜか楽しいので続けています。徹底して裏方へまわります。カッティングシートを切るのも、貼るのも、筆で描くのも、下絵を造るのも、ステンシルをカットするのも、ローラーで塗るのも、マスキングするのも、ペンキで塗るのも、ガラススタイルの貼り付けも、糸のこ挽きも、組み合わせを考えるのも、みんな生徒たちがやります。私たちは準備をし、設定をし、見守ります。けれど完成のイメージをしっかりと持っています。

子どもたち、生徒たちが作ったものなので大切にしてください。心のこもったそこにしかないものが出来上がるので、新聞テレビが取材にきて、注目されるのが子どもたちの誇りに繋がります。



NHK「いっと6けん」の取材を受ける青葉台小学校の製作者達

笑顔の度合いが成功率としてわかる仕事です。

本当は学校建築そのものが、耐震、省エネ、アメニティーに加え、さらに「楽しく」上質な空間であることが一番なのですが、私たちの活動の場はまだ多く残されています。

インフレット内容、ホームページアクセス数、総会準備、パイオニア展開催についての報告・協議。

#### ■ 編集後記

南三陸町に通って1年!コミュニケーションが人と人を繋ぐと実感しています(渡邊) 草の戸も住みかわる世ぞ春嵐(在塚) 施工の現場で複雑な気持ちで放射能チェックに立ち会っています(井出) 風邪を引きました。季節の変化についていけなくなってきたかしら(飯田) 未だ咲かぬ夜桜の舟遊、編集の皆で楽しむ(須永) お母さん達に助けられて食事会を開き、誰のためのおもてなしかと自問自答。(黒石) 五月雨に小さな蛙が巣立っていきました。(薄井)